

間鍋

度市中に往來すれば、朝に尻の輕しとみえしも、忽然と夕に満りか、れば宇治の物語にいへる、姥が米を盡る期有とも、此酒は盡る日あるべからず、むべ也、長者の號ある事、あるじ我に一語を求む、卒爾に記て贈ること乏かり、

〔書言字考節用集七器財〕間鍋カミナベ、煖酒器、言不熱不、

〔東雅器用〕鑊子〇中 即今煖酒之器を、カンナベといふは、カミナベ也、カミとは温釀をいふ也、或

はカナナベといふ語の轉じて、カンナベといひしもまた知るべからず、

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕鑊 酒鑊 俗云、加牟奈倍〇中

按温酒謂爲間以冷熱中間爲佳之俗語乎 故名間鑊湯桶詞之類也、恐鐵之訓相誤然矣 而以鑊直代銚子酌酒、卑賤之風也、

〔茶道筌蹄五〕酒次之分

銚子鍋 いにしへは火に懸ケ、爛をする器なりしを、織部田古より席上に用ゆ、

同丸 角 丸も角も利休形黒ヌリ蓋

同糸目 原叟好、道爺作、蓋三通あり、共蓋桐カラ草石蠶子ツマミ、菊唐草染付、宗入黒石蠶子撮鐵ツマミ

無地ツマミ同様なり、

同平 碎啄齋好、蓋生素銅、

同累座 碎啄齋好、黒ヌリ蓋、後了々齋好て鐵ブタを添ゆる、

同塗 利休形、丸爛鍋の通り、鐵の上を黒塗にす、

〔洞房語園〕彼在郷人忝なふはござれども、逆もの事に御酒一つたべとふござるといへば、香久山禿に言付、酒を出しければ、身どもは給ぬとて、自身と爛鍋を持って、圍爐裏の側へ行、袂から長さ六七寸計りの伽羅のわり木を二本取出し、圍爐裏へくべ、爛をして茶碗にて一つ吞、慮外ながらとて香久山にさす、